

「きよら」覚書

生塩, 睦子 / OSHIO, Mutsuko

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究 / 沖縄文化研究

(巻 / Volume)

22

(開始ページ / Start Page)

237

(終了ページ / End Page)

264

(発行年 / Year)

1996-02-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00002713>

「きよら」覚書

生 塩 睦 子

一 「清ら」系語と「影」系語

沖縄地域では、「カーギヌ アン（影がある）」は、容貌が美しいことを意味する。この「影」に対応すると考えられる「カーギ」は、北琉球すなわち奄美諸島・沖縄諸島地域では「美しい」「きれいだ」など美意識一般をさすことはなく、もっぱら「清ら」系の語がその意味を担っている。一方、南琉球すなわち宮古諸島・八重山諸島地域で、この「影」系の語が美意識一般を表す語として用いられていることは、先学の方々の説かれているところである。

「きれいだ」については、多地点を調査したものととして国立国語研究所による調査（一九六六）がある。この報告は、虹を見た場合の感情「きれいだ」と、部屋を掃除した場合の「きれいに」とを調査したもので、その結果を『日本語語地図Ⅰ』の「きれいだ」47と「きれいに」48でまとめてある。これによると、琉球列島域に関するかぎり、虹を見た場合の感情「きれいだ」と部屋を掃除した場合の「きれいに」を意味する語の分布は完全に一致している。奄美・沖縄地域では、「清ら」系の語キョラー・キュラー・クラー・キラー・チュラー・スラーが使われている。与那国島を除く先島諸島では、「影」系の語と考えられるカギー・カイーが使われ、与那国島だけは特異なアビヤーの形が記録されている。

また、琉球全域を調査した沖縄言語研究センターによる琉球列島の言語調査（一九七八年十二月～一九九〇年十月）の第4調査票に、「きれい」が調査項目として次の三項目とりあげられている。

- | | |
|-------|----------------------------|
| 4—117 | 洗ったばかりのてぬぐいはどんなだといえますか。 |
| 4—118 | 美人は顔や姿がどんなだといえますか。 |
| 4—120 | 「この花はとてもきれいだ」と、方言で言ってください。 |

これらのうち、4—117は『日本語語地図Ⅰ』の地図48に、4—120は同地図47に対応するものと考え

てよからう。この調査結果は国立国語研究所『日本語地図1』に示された事実と同じであり、さらに、手薄だった宮古地域の実態を明らかにするものとなっている。4—118に対応するものは、『日本語地図1』には見当たらない項目である。

これらの三項目について、沖縄言語研究センターによる琉球列島言語調査の結果に基づき奄美地域から八重山地域まで七十一地点について、大雑把にまとめてみると次のようになる。

- ・奄美・沖縄諸島域では「へ花がくきれい」・「へ顔姿がくきれい」・「清潔だ」の意味の「きれい」、すべてに「きよら（清ら）」系の語で表現する。
- ・宮古・八重山諸島（与那国島を除く）では、だいたい、「へ顔姿がくきれい」・「清潔だ」の意味の「きれい」には「影」系の語が使われる。また、「へ顔姿がくきれい」には、「あはれ」に対応すると考えられる「アパラギー・アツパリー」など別の形の語が使われている。
- ・与那国島では、「へ花がくきれい」・「へ顔姿がくきれい」・清潔だの意味の「きれい」すべてに「あはれ」に対応すると考えられる「アビヤー」で表現する。

また、この「美しい」「きれいだ」を意味する語については、宮古西原方言での使われ方が明らかにされている（名嘉真三成一九九四）。それによると、国語の「美しい」「きれいだ」にあたるものとして、「アハラギカン」・「カギカン」・「キチイギカン」・「ジイミギカン」の四語があり、「キチイ

ギ」は「きつし」に対応する語であろう、「ジイミギ」は音韻法則上「じみ」「ずみ」に対応する語と考えられるが未詳語である、とされている。名嘉真氏の明らかにされた点を要約すると次のようになる。

。「アハラギ」は容貌のみに使用され、姿や恰好を示す語に用いない。他の三語はいろいろな対象語をとることができる。

。「ジイミギ」は同じ美しさでも「壮麗な」という意義特徴を持つ。

。「カギ」と「キチイギ」は、それぞれ国語の「美しい」と「きれい」にはほぼ同じ意味をもつ。精神的対象語には国語の「美しい」と対応して「カギ」が用いられ、観念的对象語には「きれい」に対応して「キチイギ」を用いている。

。四つの形容詞の意義素は

アハラギ―〈容貌が美麗で、人の心を打つ状態〉

カギ―〈美麗かつ清らかで、人の心を打つ状態〉

キチイギ―〈完全で、すっきりと整っている状態〉

ジイミギ―〈壮麗で、人の心を打つ状態〉

としてまとめられる。

このように宮古西原方言では、「アハラギ」・「カギ」・「キチイギ」・「ジイミギ」の

四語は、意味が違っており、対象によって使える・使えない、があることが分かる。「アハラギー」は、沖縄言語センターの調査で明らかにされていたが、「キチイギー」・「ジイミギー」の意味・用法は新しい知見である。

これまで述べてきたことをまとめると次のように言えよう。

「きれいだ」「美しい」を意味する琉球方言は、沖縄諸島と宮古諸島を隔てる大海原を境として、北琉球では専ら「清ら」系の語のみが使用される。一方、南琉球では多方面に使用できるのが「影」系の語で、容貌に関する場合のみに使用されるのが「あはれ」系の語であり、また、地域によりその他の語も使用される。ただし、与那国島では主に「あはれ」系の語が使用される。

冒頭で述べたように、沖縄地域では「カーギヌ アン」が、容貌が美しい、の意であり、「カーギ(影)」は「美貌」を意味するのだが、そのみに止まり美意識一般をさすことはない。「きれいだ」「美しい」の意は、北琉球全地点すべて「清ら」系の語で表される。

かくも北琉球で隆盛を極める「清ら」が、なぜ南琉球で使われていないのであろうか。

沖縄言語研究センターによる調査の中で、一つ気になる報告がある。4-117「清潔だ」の回答に、

八重山・与那国島比川で「スラサン」「アビヤン」「チュラサン」の三語が併記されていることである。「スラサン」は「チュラサン」の音韻変化した形であろうが、これらは、琉球方言の標準語ともいえる首里方言の影響なのだろうか。南琉球でも「きれいだ」「美しい」意を表す方言として「清ら」を使っていたのではないか、との疑念を持たせる報告である。

二 『南島古謡』における美意識を表す語

宮古・八重山地域でも、一般に「清ら」系語が使われていたかもしれない。その手がかりを得るために、非日常語ではあるが、南島歌謡の中で美意識を表す語がどのように使われているか、を調べてみることにした。もともと筆者は宮古・八重山の歌謡を読みこなすだけの能力を持ちあわせていないので、南島歌謡の中の用例を探してみることでその概略を掴みたい。資料として、外間守善編著『南島古謡』（『日本庶民生活資料集成 第十九巻』）を用いる。本著は、その前文によると、「編者による文献・調査資料を基軸にしながらも、南島全域にわたるあらためての古謡調査のため南島古謡研究調査団を組織して、一九六九、七十年の二年間にあわせて約百日ほどの臨地調査を行った」と、「さらに広い集成をするため、四諸島のそれぞれでその島の古謡に関するもっともふさわしいと思われる研究者」のものとからなる。宮古諸島の資料は主に前者によるもの、八重山諸島の資料は後者で、喜舎場永珣氏の『八重山古謡』『八重山民謡誌』のものが基になっている。

『南島古謡』における美意識を表す語を、

「影」系語・「清ら」系語・「あはれ」系語・その他の語、の四群に分けて、

歌謡ごとに、対句や対語の中に現れるか、独立して現れるか、など

に注目してまとめてみたのが、表1と表2である。

表1 『南島古謡』における美意識を表す語 — 宮古地域 —

注 対句や対語として現れる場合、初出の方が○、後出の方が○。

独立して現れる場合、●

後節が前節の繰り返しになっている場合、前節が●、後節が○。

(古)は古謡集『宮古島の歌』に収められているアークをさす。

形態		琉球歌謡
1	狩俣祖神のニーリ(狩俣)	
2	上城金殿がニル(多良間)	
3	來間島やーますぶなかねニーリ	
4	すつづぶなかねニーリ(多良間)	
5	あがるんけーニル(多良間)	
6	やーぬんまがニル(多良間)	
「影」系語	かぎー	●●●○●○●○●○●○●○●○●○
「清ら」系語	ちゅらー	○ ○○
「あはれ」系語	あばらぎー	
その他		○(白)

		アーク	ピアシ	タービ	フサ
	(古)	(古)	1	2 1	3 2 1
15141312	11 10 9 8 7	6 5 4 3 2 1	大城元ぬピアシ (狩俣)	山のふしらづ (狩俣) 祓い声 (狩俣)	眞津眞良のフサ (狩俣) みやーむぐのフサ (狩俣) 河原のフサ (狩俣)
かぎしょうがツ	あやぐにー	唐人渡來のアヤゴ 兼久按司鬱憤のアヤゴ 黒盛の島鎮 旅栄のアーク (狩俣) まつがね 仲宗根豊親主長となりし時の アヤゴ ツなピキ なりやまアヤゲ 十四日の月だけ あがスななんみ			
おーやけんな					
金志川金盛がアヤゴ					
むとうぬんツ (狩俣)					
	○○○○○○○○○○	○○○○○○○○	○○○○ ○○○○ ○○○○ ○○○○	○○○ ○○○	○○○ ○○○ ○○○
	○○○○ (見苦しい)			○○○ ○○○ ○○○ (白)	○○○ (白) (立派に) (青)

表2 『南島古謡』における美意識を表す語 —— 八重山地域 ——

形態	琉球歌謡	
	題名	
アヨウ	1 大野だきあよう (石垣) 3 2 うむとう獄あよう (小濱) たしいしばれーあよう (石垣)	「影」系語 かいさー かいしやー
ジラバ	1 ばいさきよだじらば (波照間) 2 山じらー (西表) 3 作方じらま (小濱) 4 ゆびが夜じらば (波照間) 5 むすびぬたんこまじらば (竹富) 6 大濱たなじゃらじらば (竹富) 7 あふあり子じらば (石垣) 8 さんどうきいじらま (小濱) 9 二月じらば (新城)	「清ら」系語 ちゅらー
ユンタ	1 鳩間ゆんた (鳩間) 2 いんだれゆんた (石垣) 3 んざとうらじるくぶしゆんた (黒島) 4 たらま村ゆんた (石垣) 5 んだろーまゆんた (竹富) 6 肝すりゆいうた (竹富)	「あはれ」系語 あふあり あばれー
		その他 ○ (白) ○○ (高さ) ○○ (白さ) ○○ (白) ○○ (白)

トウバルマ	節歌	宣り言	ユングトゥ
1 トウバラマ (石垣)	181716151413121110987654321 ぼすぼう節 (石垣) 種子取節 (小濱) 租平花節 (波照間) 白鳥節 (石垣) きやいぞうぶしい (石垣) 布晒節 (その三) (石垣) しゅら節 (石垣) 桃里節 (石垣) 鳩間節 (鳩間) 安里屋節 (竹富) 布晒節 (その一) (石垣) 布晒節 (その二) (石垣) 月夜浜節 (石垣) 橋世ば節 (西表) 田補佐井戸節 (石垣) 東ぬ井戸節 (石垣) しんだすり節 (石垣) なかなん節 (与那国)	21 あーぱーれー (西表) あーぱーれーの唄 (鳩間)	4321 ぱいふたふんたか誦言 (黒島) 物作り誦言 (石垣) 深山蜘蛛 (竹富) ふんかどう誦言 (小濱)
○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ● ● ● ● ○ ○ ○ ○	● ○ ○	○ ○ ○ ○
	● ● ○ ○ ○ ○ ○ ● ● ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○	○
●	●	● ● ● ● ●	○ ● ● ●
○ (ゆたき)	○ (白き)		○ (乙女)

この結果から、「清ら」系の語が次のように使われていることが分かる。

「清ら」系の語は、宮古地域では八重山地域ほどには出てこないが、古謡であるアークの中で、主として対句の後出部分で使われている（「貢布織女のアヤグ」では初出句で使われている）。アークの中で素材の古い部分の特称とされるニーリの中でも使われている。「みゃーくぬアヤグ」と「ぎさやまがアーク」では「清ら」系語のみが使われ、「東里真中のアヤグ」では囃子として使われている。

八重山地域では、宮古地域よりも「清ら」系の語が多く現れる。古謡と分類されるジラバ・ユンタ・ユングトゥでは、主として対句の後出部分で使われている（「いんだれゆんた」は対句の初出部分で使われている）。新しい形とされる節歌では、「影」系語と同程度の頻度で「清ら」系の語が現れる。対句の後出部分で使われているのが「田補佐井戸節」「布晒節三」「しゅら節」「安里屋節」「鳩間節」の五編、対句の初出部分で使われているのが「桃里節」一編、また「清ら」系語のみの対句として使われているのが「布晒節二」「月夜浜節」「橋世ば節」「租平花節」の四編、そして独立用法として「東ぬ井戸節」「布晒節一」「しんだすり節」「安里屋節」の四編五か所である。

三 『南島古謡』における美意識を表す語の分析

これら美意識を表す「影」系語。「清ら」系語。「あはれ」系語は、それぞれどのような内容を対象に、また、どのような形で用いられているか。

美意識を表す語の対象となっているものを、

神・人・動植物・物・所・事に分けて、

「影」系語・「清ら」系語・「あはれ」系語ごとにまとめ、

さらに、それら各々の語の文法的役割が、

文の構成要素として働いている場合、述語・用言修飾語・体言修飾語のいずれであるか、

語の構成要素として使われている場合、そのみで名詞として使われているか、複合名詞を構成

する前項部分なのか、接頭辞なのか、接尾辞なのか、

に注目してまとめたのが、表3と表4である。

「影」系語と「あはれ」系語に関しては異なり語のみにとどめ、「清ら」系語はすべての用例を掲載した。()内は出典で、表1と表2で示した歌謡番号を表す。「清ら」系語が「影」系語や「あ

はれ」系語と対句として用いられている時は↑ ↓を付け、「清ら」系語どうしの対句として用いられている時は→ ←を付けた。

物	所	事
布 染色すること 織りの着物 袷の着物 着物の袖 袴 焚き物の束ね 水 月(上がる) 月(上がる) 月(上がる) 月(上がる) 月(照らす)	道 屋敷 所 浜	正月 年 旅 お供 あやぐ あやぐの糸音 寄り合い 談合・話談 談合 御捧げ
名詞 かぎさ 名詞 かぎさ 用修 くんかぎさ ↑ 名詞 かぎさん 述語 かぎさん 述語 かぎかす 述語 かぎむね ↑ 用修 かぎむね ↑ 接頭 かげ水・清水 用修 かげ水・清水 用修 ういでかきい 述語 あがすかき・ぬゆすかき 述語 あがすかき・ぬゆすかき 体修 てきらすかき・ゆどうすかき	名詞 かぎさ 述語 かぎかりヤ ↑ 接頭 美濱	接頭 かぎしょうがツ 接頭 かぎとうス 接頭 かぎたび ↑ 接頭 かぎとうむ ↑ 述語 かぎかりやよ 述語 かぎさ 述語 かぎ物 接尾 っさきかぎ
↓用修 いるちゅらさ すみうとったり (アীগ17) ↓述語 ちゅらむね (アীগ23)	→名詞 ちゅらさ (アীগ21) ↓述語 ちゅらかりヤ (アীগ19)	(シユンカニ) (アীগ16) ↓接頭 ちゅらたビ・ちゅらたビ ↓接頭 ちゅらオト (アীগ15) ←名詞 ちゅらさ (アীগ21)

<p>事</p> <p>月 浜路 橋</p> <p>旅 団体踊り</p> <p>祝宴 巻き踊り</p> <p>杯の持ち方</p> <p>酌の仕方</p> <p>酌の仕方</p> <p>土石の持ち上げ方</p> <p>帯の結び方</p> <p>字を書くこと</p>	<p>名詞 かいしゃ</p> <p>用修 かいしゃ</p> <p>名詞 かいしゃ</p> <p>まりだる</p> <p>述語 ちいみちゅらさ・なみちゅらさ (節歌14)</p>
	<p>名詞 かいしゃ</p> <p>述語 かいさる ↑</p> <p>述語 かいしゃぬ ↑</p> <p>述語 かいしゃぬ ↑</p> <p>述語 かいしゃぬ ↑</p>
	<p>述語 ちゅらなる (宣り言1)</p> <p>述語 ちゅらさぬ (宣り言10)</p> <p>述語 ちゅらさ (節歌15)</p> <p>述語 ちゅらさぬ (ユンタ2)</p> <p>↓ ゆたさ</p>
	<p>述語 かいしゃ ↑</p>

「清ら」の文字表出は、「ちゅら」「ちゆら」「美ら」「——じゅら」を含む(がほとんどであるが、その他、宮古地域では、「ツらさ」(一例)。「ちよらめ」(一例)。「ちよらまれ」(一例)。「ちゃらたび」(一例)、八重山地域では、「きゆらさ」(一例)。「きゆみじゅ」(一例)のようにも表記されている。

宮古地域での「清ら」が主に対句の後出部分で使われることはすでに述べたが、「清ら」の向けられる対象は表3に見られる通りいろいろある。まず二ーリの三例は、二ーリの終末句で、神に向けてまず「かぎしゃ」と述べ、次の対句の中で「ちゅらしゃ」と使っている。「ちゅらさ」ではなく、「ちゅ

らしゃ」と使っているのは、宮古・八重山地域を通じてこの三例以外にはない。この他、対句（繰り返し句を含む）の中で「かぎー」↑↓「ちゅらー」とされているのは、一例を除いていづれもアークの中で使われており、男の子の誕生・女性の袴・屋敷とトコロ、また接頭辞として、旅（二例のうち一例はシュンカニで使われている）・お供である。染色すること、に対しては「ちゅらー」↑↓「かぎー」の順で繰り返し句に使われている。同じ対句でもアーク21のものは「清ら」だけで「みちぬちゅらさや かいやぬじょう（道の美しさは 假屋の門）／あやぐぬちゅらさや みゃーくぬあやぐ（あやぐの美しさは 宮古のあやぐ）」のように、道、あやぐの美しさを説明するのに「ちゅらさ」を使っている。

また、アーク20に用いられている「ちよらめ」は「みやアらび」の対語、「ちよらまれ」（芭蕉の美しき生まれ）は、「やばまアれ」（豆の若芽の軟らかな生まれ）に呼応する対語である。さらにアーク22では、雛子に「よーちゅらよー さーまたよいさー」と使われている。

八重山地域では宮古地域よりも「清ら」系語が多く現れるのはすでに述べたが、多くなっているのは対句・繰り返し句での使用もさることながら、「清ら」のみでの用法が多くなっている。当然、「清ら」とみられる対象も宮古地域より多い。対句（繰り返し句を含む）の中で「影ー」↑↓「清らー」とされているのは、乙女・蒲葵・用木・船のたたずまい・団体踊りと祝宴・杯の持ち方と酌の仕方である。接頭辞としては使われていない。

「清らー」↑↓「影ー」の順で使われているのが、帯の結び方が「ちゅらさぬ」↑↓字を書くことが「かいしゃ」（ユンタ2）、花の色が「ちゅらさ」は桜の花↑↓乙女の色艶が「かいしゃ」は我が島（節歌8）、という二例である。また、「あはれー」↑↓「清らー」の繰返し句で美女を表現している（ユンタ4）のもあり、他の語「ゆたさ」↑↓「清ら」の対句で、井戸を掘ることの「ゆたさ」↑↓土石を持ち上げることの「ちゅらさ」とした用例もある。「清ら」のみの対句で使われているのは、いづれも布晒節に出てきており、「ちゅらさ」とされているのは、布↑↓綾・しいじい（糸筋）↑↓ゆみ（糸筋）である。

「清ら」が独立的に用いられているものでは、乙女・稲粟の色艶・布の色艶に対して「ちゅらさ」とされており、接頭辞としては、水に付いた「きゆみじゅ」の用例がある。

また、「あはれ」系語と「影」系語に関しては次のように言えよう。

「あはれ」系語は、宮古地域・八重山地域とも女性に対してしか使われていない。殊に「あばらぎ」「あふあり」などを年の若い女性、乙女に対する体言修飾語として使う用例が多い。「あばらぎかいば」のように述語で使われたり、「あばり 生ればし」のように用言修飾語で使われたりもしているが、文法的役割がどうあろうと、若い女性の「容貌の美しさ」の意でしか使われていない。

一方、「影」系の語は多くの対象に対して使われている。「かぎさ」「かいしゃ」ととらえる対象

は広く、神・人・動植物・物・事すべての分野に及ぶ。すばらしい・有り難い・立派・優良・見事・清浄美・華麗・品が良い・精巧・善良・音の妙なることなど、その意味するところは広い。奄美・沖縄地域の古謡で「清ら」が頻出するが、その担っている意味を、宮古・八重山地域では「影」系語が担っているようである。

四 南琉球における「清ら」系語

宮古・八重山地域（南琉球）において、琉球歌謡の中から「清ら」が用いられていることをどう理解するかについて、

- ・ 古くは南琉球でも「清ら」が使われていた、
 - ・ 沖縄の中央語たる首里方言を借用した、
- の二つが考えられる。

そして、琉球歌謡の中で「清ら」が使われているのにもかかわらず、現在南琉球で「清ら」系語使用の報告がない（先述の与那国の例を除いて）ことについて、

- ・ 南琉球でも「清ら」系語が使われていたのではなからうか、
- ・ 首里方言を借用したとしても、歌謡の中では「清ら」を使ってきたのに、なぜ現在の日常会話では使われないのだろう、

ということが疑問に思えてくる。考えは熟してはいないが、目下考えていることを申し述べる。

i. 南琉球でも「清ら」系語が使われていたのではなからうか。

上村幸雄先生は、琉球大学での最終講義（一九九五年二月十一日）で「奄美沖繩方言群と宮古八重山方言群とのあいだの幾多のおおくの差異にもかかわらず、基本的にはひとつの波によって成立した全体として本土方言に対してまとまりある特徴を維持する方言であることが判明した」とおっしゃった。これは、いままで言われてきた、奄美沖繩方言群と宮古八重山方言群との音韻・文法における大きな違いを、一まとまりの方言圏のなかの音韻変化がもたらした差異である、とのご見解と解釈される。

一般には、語彙においても奄美沖繩方言群と宮古八重山方言群とで大きな差があるように思われているようだが、音韻対応・音韻変化による違いからくるものと説明できる語が多いようである。中本正智氏の『図説琉球語辞典』（一九八二）をみても、北琉球と南琉球ときれいに分かれる語彙が少ない上に、あったとしても、音韻対応・音韻変化による違いからくる語が多い。別語系統と考えられるのは、「卵」を北琉球「クガ系」語・南琉球「トヌカ系」語を使い、「砂」を北琉球「スナ系」語・南琉球「イナゴ系」語を使うなど、ごく少数の語に限られるようである。

「美しい・きれいだ」を意味する語が、人間の精神作用を語るにかなり重要性をもつと思われるだけに、琉球語圏全体で「清ら」系語が使われていた可能性も考えられはしないか。かの昔から今に至

るまで、南琉球で「清ら」系語を使ってきた地点があっても不思議ではないと思う。

「清ら」系語の使用が確認されていないだけのことではないのか（先に述べた与那国島比川の例はその存在をうかがわせる）、これが一つ。また、使っていても、調査する側と回答する側双方に、その土地固有の言葉かどうかの取捨選択により取り上げられないとか、使っていても借用語・移入語との考えがあつて記録に残らなかった、というようなことがなかったとは言いきれないのではないか、これが二つ目の推測である。しかし、調査者が外来の人ではなく、その土地の生活者である場合には、この推測はあたるまい。

ii. 南琉球で、歌謡の中には「清ら」を使ってきたのに、現在日常会話で「清ら」系語が使われていないのはなぜか。

『南島古謡』における美意識を表す語、および『南島古謡』における美意識を表す語の分析、において明らかにしたように、宮古・八重山地域の歌謡の中で確かに「清ら」が使われていた。対語・対句を重ねながらことからの進行が述べられていく、という歌謡の特性、「清ら」系語が「影」系語とだいたい同じ対象に、「影」系語に付随する形で多く用いられている事実から考えると、沖縄の標準語たる首里語からの借用と考えるのがやはり妥当なところであろうか。

「清ら」系語が借用だとしても、生活の中に根をはっている古謡・歌謡のなかで宮古・八重山の人々

が口にし耳にした語である。日常生活で使ってもよさそうなものであるのに「清ら」系語が使われなかったのはなぜか。

伊江島方言に「シューラーシャ」という言葉がある。女性に対して使う言葉で、立ち居振る舞いが立派で品があつて美しい。奥ゆかしい美しさだ、といった意味である。この語は、琉歌に現れる「しほらしや」に対応する語で、『おもろさうし』には全く見当たらない。つねづね「シューラーシャ」は琉歌の「しほらしや」からきた言葉であろうと思つていたところ、外間守善先生（『南島の抒情』一九九五）の次のようなお考えに出会つた。

「しほらしや」は花の匂いや琴の音などを対象とし、嗅覚、聴覚が中心であるのが特徴である。
……中略……沖繩にはない「梅」「鶯」といったものを題材にした観念的な歌の中で使われることを考えると、香道、芸道、和文学など近世文化につれだつて入ってきた移入語かと思われる。
……中略……「きよらさ」が美一般をいわば外面的に表す語であるのに対し、「しほらしや」は愛らしく、ゆかしく、上品優美で、いつくしむべき対象に対する美感を、嗅覚、聴覚を通して内面的に表現する語といえる。……中略……「きよらさ」は現代語としてチュラサンに変わつていったが「しほらしや」はスーラーサン（那覇方言）、シューラーシャン（首里方言）、スーラーセン（今帰仁方言）などのように変化している。意味は、しおらしい、かわいらしい、かれんである、美しい、品がある、優雅である、さっぱりしている（沖繩語辞典・今帰仁方言辞典）などで、古

典語の意味がほとんどそのまま受けつがれている。

たしかに伊江島方言の「チュラサ」と「シューラーシャ」の意味の違いも同様に説明できる。すなわち、「チュラサ」が目で見える外面的な美しさをいうのに対し、「シューラーシャ」は内面から醸しだされる美しさをいうのである。

このように琉歌の「しほらしや」は沖縄の諸地域で生活語のなかに根づいた。宮古・八重山地域、南琉球で「清ら」はなぜ根づかなかったか。(ちなみに宮古島の民話 第4集『ゆがたい』(一九八四)に目を通して見たが、共通語の「きれいな」は二か所使われていたが「チュラサ」はなかった。)それは「影(カギサ・カイシャ)」と「清ら(チュラサ)」の意味するところがほぼ同じ、ということからはななかりうか。同じであるならば「影(カギサ・カイシャ)」だけでこと足りる。沖縄地域で「しほらしや」が根づいたのは、「清ら」と意味の使い分けがあったからこそ、「清ら」で表現できないところを「しほらしや」と言ったのであろう。

ともあれ、『南島古謡』における「清ら」は常識的には借用と考えるのが妥当であろう、と考えてはいるが、現琉球方言で「美しい・きれいだ」に対応する語が北琉球と南琉球とであれだけ見事に「清ら」系と「影」系に分かれるものだろうか、との疑問から、南琉球で「清ら」系語が生活語として使われてきており、今も使われているかもしれない、との考えが捨てきれないのである。

先学諸氏のご叱正を是非とも賜りたく、心からお願い申し上げます。

○

一九六四年夏、私は生まれて初めて沖縄の地を踏んだ。復帰前のこととて総理府発行の身分証明書を携えての渡航であった。運良く仲宗根政善先生がハワイ大学から帰国されたばかり、ということ为名嘉順一先輩が先生のお宅へ連れて行ってくださった。

爾来三十有余年、仲宗根先生のお蔭を忝うさせていただいた。琉球方言を勉強するには、遠来の地からの調査では無理と分かり、琉球大学で勉強させていただきたいと申し出たところ、快く研究生としてお引受けくださった。先生は、琉球方言のイロハからお教えくださり、その夏の波照間方言調査に同行させてくださるなど、広島人の私になんとか琉球方言を研究できるよう育ててくださった。伊江島方言についての研究が曲がりなりにもできているのは、ひとえに仲宗根先生のご指導の賜物である。

勉強だけに明け暮れた琉球大学研究生としてのあの一年間は、夢のような楽しい毎日であった。その年（一九六五年）の秋、研究室での先生との会話の中で「チュラカーギ」のことに話が及んだ。

「美しい」は琉球方言にはなく、奄美・沖縄ではもっぱら「きよら」を使う。先島では「きよら」が全く用いられないで「かげ」が「美しさ・立派さ」を表す。沖縄本島でも、「きよら」を使わ

ないでも「カーギヌ アン」で容貌の美しいことを意味する。それが「カーギ」だけでは気がすまなくなつて「チュラカーギー」というようになった。「チュラカーギー」、これはいい題ですよ。あなたにあげます。

とあいなつた。私はこの重い題を真剣に受け止め、二年後、広島大学国語国文学会で仲宗根先生の仰せの通り「チュラカーギー」と題して口頭発表した。が、あまりにも大きな内容をもっていたため成稿となすに至らなかつた。

その後ずっとこの題を頭の片隅において過ごしてきたが、日常生活の忙しさの中で伊江島方言の整理がやつとのありさまで、「チュラカーギ」とはすっかりご無沙汰していた。今回、はるか昔の、先生からの宿題を提出すべく本稿をまとめてみたが、やはり成稿にはほど遠く、「きよら」覚書、とせざるをえなかつた。今のところこれにて仲宗根先生のお許しを乞いたいと思う。

仲宗根政善先生の御霊の安からんことを祈りつつ、改めてご高恩に対し心から感謝申し上げる次第である。

引用文献

- 上村幸雄 一九九五 「音声研究と琉球方言学」 沖繩言語研究センター資料 No. 一一九
沖繩言語研究センター 未刊 『琉球列島の言語の研究』
国立国語研究所 一九六六 『日本言語地図 一』 大蔵省印刷局
名嘉真三成 一九九四 「西原方言の形容詞の意味論的研究(1)」 『琉球の方言』 19
中本正智 一九八一 『図説琉球語辞典』 力富書房金鶏社
外間守善・仲原善忠 一九六七 『おもろさうし 辞典総索引』 角川書店
外間守善編 一九七一 『日本庶民生活史料集成 第19巻 南島古謡』 三一書房
外間守善 一九九五 『南島の抒情——琉歌』 中央公論社
宮古民話の会 一九八四 『ゆがたい——宮古島の民話 第四集』 宮古民話の会

法政大学沖繩文化研究所